



第二次世界大戦後のテヘラン・バーザール における政治組織と社会運動

貫井 万里 早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手

はじめに

一九世紀後半のタバコボイコット運動に始まり、二〇世紀初頭の立憲革命、一九五〇年代の石油国有化運動、一九六三年ホルグード月一五日蜂起、一九七九年イラン革命に至る近現代イランの社会運動において、当局の圧政に抗議して町の中心にあるバーザールが閉鎖され、ウラマーや世俗的知識人とともに、バーザールの商人や職人が抗議活動を繰り広げる姿が目撃されてきた。

バーザールは、イラン都市にある伝統的な商工業区域を示し、屋根やドームで覆われた通路の両側に同業種の商店が軒を並べ、通りの奥には中庭形式のキャラバンサライやモスク、ハンマームなどが点在する商業、宗教、政治、社会的要素を内在した空間である¹⁾。バーザリーという用語は、一般的に「バーザールで働く人々」を指すが、バーザールには、富裕な貿易商や卸売商から、貧しい行商人や年少の職人見習いまで、様々な社会階層の人々が集っている。バーザールのヒエラルキーの頂点には、外国貿易に携わる大商人、中間層には、仲買人や卸売業者、アスナーフと呼ばれる同業者組合（単数形はセーフ）に所属する小売商や職人の親方、そして下層に多数の下働きの労働者や店を持たない行商人、そしてバーザールの外の広場（メイダーン）で生鮮食品を扱う商人といった階層が存在した²⁾。

バーザリーの社会運動参加の動機として、これまで、バーザリーと宗教指導者の伝統的紐帯やバーザリーの敬虔さを理由に宗教的要因を重視する説（宗教要因説）と、功利主義的な立場からバーザリー自身による経済

的利益の追求に注目する説（経済要因説）の二つが唱えられてきた。「モスク」や「バーザール連合論」に代表される宗教要因説によれば、ウラマーは、伝統的に婚姻や宗教儀礼を通してバーザリーと密接な関係を持ち、さらに、寄付金と宗教税（フムス）の代償として、歴史的にバーザリーの不満を当局に代弁する役割を果たしてきた³⁾。

経済要因説では、第二次世界大戦後の国家の経済政策により、大商人層に対して、相対的に不平等な地位に置かれたバーザールの中間層が、階級的な利害回復のために、テヘラン・バーザール内の商人・アスナーフ・職人連盟という組織に集って、運動を展開させたとされる⁴⁾。

これに対し、ケシャーヴァルズイアーンは、従来の研究がバーザリーを一枚岩の存在として扱い、その多様性を無視している点を批判した上で、日常的な不満を社会運動に変化させる原動力として、「イデオロギー」や「階級的利害」よりも、バーザール内の「ネットワーク」が重要であると論じている。ケシャーヴァルズイアーンは、政府とテヘラン・バーザールの関係に焦点を当て、政府の政策がバーザール内の支配構造に影響し、それがバーザリー間の経済的・社会的・文化的関係性、すなわち、ネットワークを変容させていると考えた。このネットワーク論では、パフラヴィー朝期に伝統的なバーザールの経済力を削減するためになされた一連の近代化政策は、テヘラン・バーザールの共同体としての凝集力を高め、当局への不満を集団行動に転換することが容易な支配構造、「協力的ヒエラルキー」が形成されたのに対し、一九七九年のイラン革命後、イスラーム政権は、バーザールの一部を当局の支配体制に取り込んだために、バーザール内の共同体的な紐帯は分断され、社会運動が発生しにくい「強圧的ヒエラルキー」の構造となった

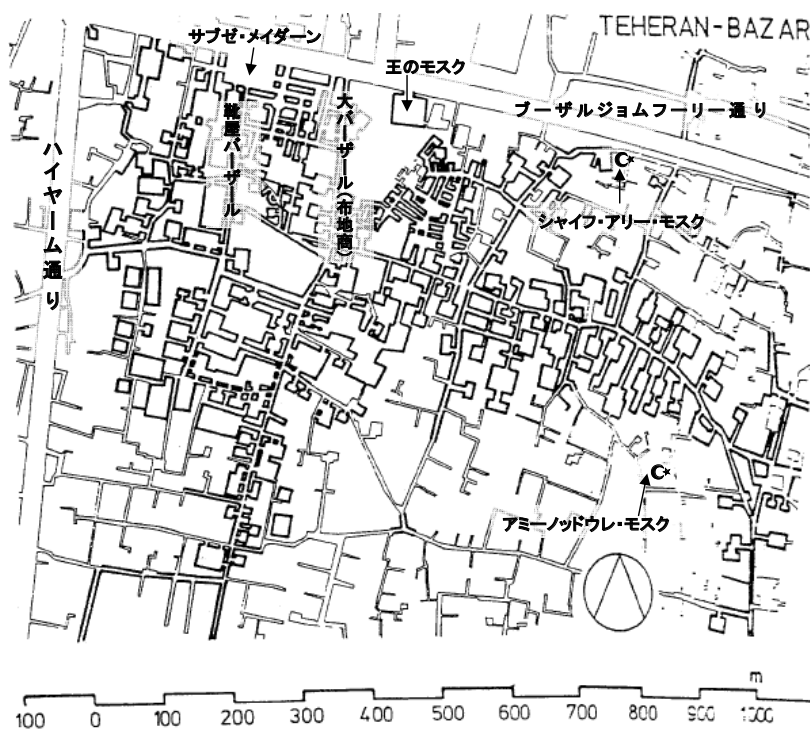


図1 テヘラン・バーザール

(出典: Soltānzādeh, Hosein, *Bāzārḥā-ye Irān*, Tehran: Daftar-e Pazhūeshḥā-ye Farhangī, 2001/1380 (kh.), p.59より筆者作成)

と論じられる⁵⁶⁾。

ケシャーヴァアルズイアーンは、革命前に国民戦線系「商人・アスナーフ・職人連盟」(*Jam'e-ye Bazargān va Asnaf va Fshavarān* 以後、アスナーフ連盟と表記)と「イスラーム・モタレフェ協会」(*Jam'i-ye Mo'talefe-ye Estāni* 以後、モタレフェ協会と表記)のリーダーたちは、「協力的ヒエラルキー」を効果的に活用して、バーザリーを動員し、バーザリーの方でも、「協力的ヒエラルキー」の下で形成されたリーダーたちの名声を信用して運動に参加したとしている⁵⁷⁾。しかし、政治組織の詳細な考察に欠いているため、一義的に日常的な商取引を円滑に運ぶために形成されたバーザール内のネットワークが、どのように当局からの物理的攻撃というリスクを伴う政治行動

に転換されたのか、曖昧な点が残る。

そこで、本論では、社会運動が展開される際、バーザール内の政治組織が、ネットワークの核となり、バーザリーのアイデンティティを統合していたと考え、「組織」を分析対象とした。すなわち、一九五〇年代から一九七〇年代まで、テヘラン・バーザールの主要な政治組織であった二つの組織——ナシヨナリズムを奉ずるアスナーフ連盟とイスラーム主義組織モタレフェ協会——の特質、両者の協調と対立関係を考察することで、ケシャーヴァアルズイアーンの所論を検討し、テヘラン・バーザールにおける社会運動の新たな側面を探究することとしたい。

一．アスナーフ連盟

アスナーフ連盟は、一九五一年に伝統的なバーザールの同業者組合を中心に、石油国有化運動とモサツデク政権を支持するために、テヘラン・バーザール内で結成された組織である。当初、連盟に参加した組織は、布地や既製服、靴など伝統的な産業に携わるアスナーフが中心であったが、石油国有化運動が高揚するに従い、参加したアスナーフは四〇を超え、構成員は二十人以上に上った⁵⁸⁾。

同連盟の代表は、布靴商を営んでいたハージ・モハンマド・ラーソフが務め、「リーシュセフィード」(長老 *rishsfid*) と呼ばれた(写真二)。リーシュセフィードとは、セフを代表するリーダーに与えられた伝統的な肩書で、ガージャール朝期には、バーザリー間の紛争の解決や、当局とバーザリーの間を仲介する役割を担った。パフラヴィー朝第一代国王レザー・シャー(在位一九二五—四二)が一九二〇年代に近代化政策を進め、近代的な司法制度や警察制度が整備されるに伴い、リーシュセフィードの権威とバーザールの自治性は低下したが、一九五〇年代においても、リーシュセフィードは、バーザール内で尊崇されていた⁵⁹⁾。

一九四一年、連合軍進駐後の「貿易の自由化」政策で欧米の安価な製品が流入し、伝統的な手工業者や零細な製造業者は大きな打撃を受けた。パフラヴィー朝の保護を受けた少数の特権的な資本家による経済支配に不満を抱いた中小の商人・職人は、国内産業保護育成政策を掲げるモハンマド・モサツデク首相を支持するようになっていった⁶⁰⁾。国内の伝統的産業を担うアスナーフを中心に構成されたアスナーフ連盟は、モサツデクの唱える「ナシヨ



写真1

1952年6月29日、モサッデク内閣の支持とハーグの国際司法裁判所での活躍を労うためにモサッデク首相と会見したハージ・ラーソフ以下62名のアスナフ連盟の代表者たち(出典: *Ettelâ'ât*, 29 June 1952)

ナリズム」や「国内産業育成政策」を熱心に支持し、抗議活動において「立憲制や民主主義の擁護」を唱えているが、確固としたイデオロギーは見られない¹⁰⁾。同連盟は、バーザール共同体全体の利害を調整でき、共通の歴史体験を喚起させる漠然としたテーゼを掲げていたものと考えられる。

一九五三年八月一九日に、英米とイラン国内の保守派の策謀したクーデターで、モサッデク政権が崩壊した後、モサッデクと国民戦線リーダーは逮捕、拘禁され、国民戦線は非合法化された。アスナフ連盟は、八月にクーデターへ抗議するために、十月には逮捕されたモサッデクの公判闘争に呼応して、テヘラン・バーザールを閉鎖した。十一月にテヘラン大学の学生と共同で抗議運動を展開するために、テヘラン・バーザールが閉鎖された際に、当局はバーザールの屋根の一部を破壊し、焼肉屋のハサン・シャムシーリーを含む三百名のバーザーリーと学生を逮捕し、イラン南部のハーグ島に追放した。一九五七年には、CIAの協力でサヴァク(国家情報治安機構)と呼ばれる秘密警察が設立され、政治活動が厳重な監視下に置かれるようになる¹¹⁾と、アスナフ連盟の活動は地下活動を余儀なくされた。

こうした閉塞状況から一転して、一九六〇年から六三年まで政治自由化の時代が到来した。一九五三年以降、アメリカの莫大な軍事・経済援助資金が

流入し、さらに定期的な石油収入でイラン経済は潤うようになったが、その大半は、国王の親族とそれに癒着した特権的な官僚や企業家、地主に吸収され、政治腐敗が蔓延していた。米ケネディ政権はこうした上層部の腐敗と厳しい政治的弾圧を原因とする共産主義革命の可能性を危惧し、国王に国内改革の圧力をかけた。国王は、自由化政策をアピールするために、政治犯の多くを釈放し、第二〇回議会選挙を自由選挙にすると宣言した。これを受け、モサッデクの自由民主主義・民族主義路線を踏襲するグループを再び広く統合して、一九六〇年に第二国民戦線が結成された。

バーザールでも、同時期に、小間物商のハージ・マフムード・マーニヤーン、既成服商センフ・リーダーのアボルガーセム・レバースチーやハージ・ハサン・ガーセミーエらが、アスナフ連盟を再結成し、バーザールを代表して第二国民戦線に合流した。レバースチーが「当時、政党がなかったため、反政府派の組織は全て、国民戦線の傘下に集った。大学もバーザールも国民戦線の影響下にあった。労働者の間すらも一定の影響力を持つようとしていた」と語っているように、第二国民戦線の民主化運動は、独裁政治に倦んだ人々から大きな歓迎でもって迎えられた¹²⁾。しかし、第二国民戦線のメンバーは全国で選挙に立候補するが、当局の選挙工作により、一名を除いて全て落選した。これに対し、国民戦線のリーダーは、当局に抗議するが、主要メンバーは逮捕され、再びその活動は地下に潜行した。後節で詳述するように、アスナフ連盟と国民戦線は、一九七七年に再結成され、革命運動に参加した。

一九五〇年代から七〇年代まで、テヘラン・バーザールを代表したアスナフ連盟の政治力は、バーザール閉鎖の決定権を持つていたことに由来する。一九五〇年代にイランでは、全国各都市に流通網を張り巡らしたバーザールは、イランの流通部門と軽工業部門の中核を担った。バーザールによる国内流通の支配は、一九七〇年代においてもイラン国内産品の流通の三分の二をコントロールするほど強固に維持された¹³⁾。従って、バーザールの閉鎖は、そこでの経済活動の中止を意味し、イラン経済システムを麻痺させ、都市住民の社会生活、ひいては、国家の政治にも多大な影響をもたらしている行為であった。一九六三年ホルダード月十五日蜂起がバーザールを中心に全国で激しく展開している中で、当局は、以下のように、バーザールの政治力を認識していた。

国家の通常状態の回復のために、第一に必要な措置は、バーザールと商店を開業させることである。テヘラン・バーザールや他の都市のバーザール閉鎖が、国家の騒乱状態継続の原因であり、反体制派は、この事態を人々からの支持とシンパシーの印とみなし、疑いの余地なく、バーザール閉鎖を政府からの要求獲得の手段と捉えている。¹⁴⁾

政治、経済の中心であり、各地のバーザールとの全国的なネットワークを持つ首都テヘランのバーザールの閉鎖は、イラン社会、政治に大きなインパクトを与えることのできる効果的な「抗議の手段」であったといえる。テヘラン・バーザールの中でも、靴屋バーザールと布地商バーザールの閉鎖が、バーザール全体の閉鎖の帰趨に係る要であった。同じく一九六三年ホルダー下月十五日蜂起についてのサヴァク報告書で、「バーザールの最重要部分は、靴屋バーザールと大バーザール（別名、布地商バーザール）である。もし、この二つのバーザールが、商店を閉鎖あるいは開業し始めれば、いつでも、他の部分もそれに追従する。」と説明している。¹⁵⁾

アスナーフ連盟において、中心的役割を担っていたのは、靴屋セーフや布地商セーフのリーダーたちである。靴屋バーザールと大バーザールが、テヘラン・バーザールの正面入り口サブゼ・メイダーンや王のモスク（現在、イマーム・ホメイニー・モスク）に近いという地理的な要因に加え、バーザール内でのそれらのセーフの相対的な地位の高さもアスナーフ連盟内での発言権の強さに影響していたと考えられる（図1）。伝統的に、バーザール内で、奢侈品を扱う貴金属、布地、近年では絨毯等のアスナーフが高い地位を占め、バーザールの中心地に近く、条件の良い場所に店を構えた。それに対し、安価で、騒音や悪臭を出しやすい鉄器や煉瓦など土木関係、皮なめし業、生鮮食品は、相対的に低い地位とみなされ、中心部から遠いバーザールの周辺部分に立地することが多かった。¹⁶⁾

一九五〇年代石油国有化運動期の記録によれば、テヘラン・バーザールの閉鎖は、政治危機に際し、特別会議が招集され、セーフのリーダーから構成されるアスナーフ連盟のメンバー約五百名の協議の結果、決定されていたことが判明している。バーザールの閉鎖決定後に、アスナーフ連盟の代表が、国民戦線リーダーの一人であったアボルガーセム・カーシャーニー師の下に赴き、バーザール閉鎖とゼネストを訴える声明書を連名で発表していた¹⁷⁾。しかし、一九五二年秋以降、カーシャーニー師とモサッデク首相の不和が深

まると、アスナーフ連盟は、カーシャーニー師ではなく、モサッデクを支持し続け、国民戦線の世俗政党との関係を深めた。既にパールサーやケシャーヴァルズイアーンも指摘しているように、アスナーフ連盟の政治行動は、宗教要因だけでは十分に説明できない¹⁸⁾。むしろ、ウラマーとアスナーフ連盟の共闘は、物理的な攻撃に弱いバーザールにとってバーザール閉鎖に代表される抗議活動の効果を最大化し、当局からの弾圧を緩和するための戦略の一つであったものと考えられる。

アスナーフ連盟は、伝統的な産業を担うアスナーフを中心に、バーザール内での商取引や宗教行事、共通の歴史体験の中で形成された伝統的な共同体を基に緩やかに統合され、モサッデク及び国民戦線の主唱する「ナシヨナリズム」、「民主主義」、「立憲制」、「国内産業保護」を支持し、強固なイデオロギーを持たない組織であった。同組織は、一九五一年にモサッデク政権支持のために成立し、一九五三年八月の政権崩壊後の弾圧で、活動休止状態となったが、一九六〇年と一九七七年の政治自由化の機会に復活し、国民戦線と共に反国王運動に参加した。

二．モタレフェ協会

モタレフェ協会は、一九六三年に、ルーホッラー・ムーサヴィー・ホメイニー師の指示により、バーザールの中小商人や職人からなる三つの「ヘイアト *Heiat*」と呼ばれる宗教組織が合体してできた組織である。ヘイアトは、元来シーア派第三代イマーム・ホセインを追悼する儀式を共同で挙行する、日本でいうと「講」のような地縁的色彩の濃い宗教組織である¹⁹⁾。一つ目のグループは「バーザール門のヘイアト（別名アミノッドウレ・モスクのヘイアト）」であり、二つ目は「ヘイアテ・エスファハーニーハー」という名で、テヘラン・バーザール内のエスファハーン出身の商人たちを中心とした組織で、三番目は、「シエイフ・アリー・モスクのヘイアト」と呼ばれ、シエイフ・アリー・モスクに集うバーザールたちのヘイアトであった。

「バーザール門のヘイアト」は、元フェダーイーヤーネ・エスラームの中心メンバーであったメフディー・エラギーによって結成された。フェダーイーヤーネ・エスラームは、テヘラン・バーザールの貧しい商人・職人を支持基盤とし、一九四五年にナツヴァーブ・サファヴィーによって創設されたイスラーム主義組織である。同組織は、イスラーム統治体制の樹立を目指

し、要人のテロという手段でパフラヴィー朝の独裁体制に挑戦した。フェダーイーヤーネ・エスラームのメンバーは、アブドゥルホセイン・ハジール宮廷大臣に続いて、一九五一年三月に、英国系アングロ・イラニアン石油会社との石油交渉の締結に強い意欲を見せていたアリー・ラズマラー首相を暗殺した。その直後に、石油国有化法が成立し、石油国有化運動のリーダー、モハンマド・モサッデクが首相に就任した。

モサッデク首相は同グループのテロ行為を嫌悪し、フェダーイーヤーネ・エスラームと密接な関係にあった国民戦線のリーダー、アボルガーセム・カーシャーニー師に同グループとの決別を迫った。カーシャーニー師は、一時期、フェダーイーヤーネ・エスラームと距離を置いたが、一九五二年八月以降、モサッデクと袂を分かつと、フェダーイーヤーネ・エスラームとの関係を再開した。フェダーイーヤーネ・エスラームのメンバーは、一九五五年に創設者のサファヴィーがホセイン・アラール首相暗殺未遂事件の首謀者として処刑され、カーシャーニー師も一九六二年に死去すると、ホメイニー師を指導者として仰ぐようになった²⁰。

メフデイー・エラーギーら残ったメンバーは、アミーノッドウレ・モスク近辺のバーザリーを組織化して「バーザール門のヘイアト」を結成し、毎週、説法会を開催したり、慈善活動に従事したりした。活動を始めて間もない時期に、同ヘイアトのメンバーは、アミーノッドウレ・モスクの礼拝導師を通じて、モハンマド・ベヘシュティ師と知り合い、ホメイニー師の主導する一九六二年地方評議会法案反対運動に参加していった²¹。

「ヘイアテ・エスファハーニー」は、ミールモハンマド・サーデキがエスファハーン出身のバーザール商人仲間とともに、禁酒を始めとするイスラーム道徳の普及を目的に設立したヘイアトである。サーデキらは、モルタザー・モタッハリ師に、同組織の毎週金曜日の会合での講義を依頼したが、モタッハリ師は多忙さを理由にベヘシュティ師を紹介した。こうした繋がりの中で、サーデキらは、一九六二年にホメイニー師と知己を得た²²。

「シエイフ・アリー・モスクのヘイアト」は、一九五三年頃、サーデク・アマニー及びモハンマド・サーデク・エスラーミーによって組織された。一九四〇年代に、アマニーは、テヘラン南部の宗教教育施設「イスラーム教育協会」に出入りする中で、エスラーミーやフェダーイーヤーネ・エスラームのメフデイー・エラーギーらと交流するようになった。その後、アマニー

とエスラーミーは、石油国有化運動を支持するために設立した「シーア派グループ」が一九五三年に分裂した後、新たに「シエイフ・アリー・モスクのヘイアト」を結成した。アマニーらは、当時、半ば荒廃していたシエイフ・アリー・モスクを再建し、独自のヘイアトを結成し、青少年の教導を目的とした野外キャンプのような娯楽イベントや会議を開催した²³。

一九六二年秋にホメイニー師は、十月に内閣で承認された地方評議会法案に反対するために、テヘランの約三十のヘイアトの代表をゴムに招集した。個々に宗教・慈善活動を行っていたヘイアトは、ホメイニー師を中心とする「反体制派ウラマー・ネットワーク」と共闘する中で、次第に組織化され、上記の三つの代表的なヘイアトが合体してイスラーム・モタレフェ協会が設立された²⁴。

ホメイニー師は同協会の要請で十人のイスラーム法学者を自らの代理に任命した。ホメイニー師のイラク亡命中、モタッハリ師、ベヘシュティ師、マヒヤッディーン・アンヴァリー師らのイスラーム法学者が、定期的にモタレフェ協会のメンバーと会合を開き、宗教の講義を通して、バーザール商人たちにホメイニーの思想を伝えた。そして重要な点は、協会のメンバーが政治行動を起こす際に彼らが宗教的正当性を与えたことである。

モタレフェ協会は、フェダーイーヤーネ・エスラームの歴史を引き継ぐ急進的なイスラーム主義の政治組織という色彩と、モスクを中心としてイスラームの宗教行事を運営する敬虔なムスリムの伝統的宗教組織（ヘイアト）、バーザール周辺地区という地縁的色彩を有していた。すなわち、ゴムのホメイニー師を中心とする反体制派ウラマー・ネットワークに、イスラーム主義のバーザリーが交差する中で、次第に反体制派のモスク・ネットワークが形成されていったものと考えられる。モタレフェ協会メンバーの職業は、鉄器商、青果商、皮革業、水道工事、木材商、土木建材業、パン屋などの労働者あるいは店主で、アスナフ連盟と比べると、バーザールの周縁に位置し、バーザール内のヒエラルキーの相対的下層の人々で構成された²⁵。また、モタレフェ協会は、当局による過酷な弾圧とホメイニー師の国外追放のために、一九六四年以降は、秘密主義的傾向と武装闘争路線を深め、オープンであるために組織力に欠け、物理的な力に脆弱であったアスナフ連盟と対象をなした。

三三 一九六三年ホルダード月十五日蜂起

一九六〇年代初頭、パフラヴィー朝第二代国王モハンマド・レザー・シャー（在位一九四一―七九）は、農地改革と婦人選挙権の導入を主眼として、上からの改革、「白色革命」に着手した。ホメイニー師を初めとする宗教勢力は、農地改革によってモスクやマドラサ所有の多大な土地が接収されることを恐れた。折しも、一九六一年に、ウラマーの政治活動を禁じていたシリア派最高権威（マルジャア・アッハタクリード）のモハンマド・ホセイーン・ボルージェルデー師が死去したため、一九六二年以降、ホメイニー師とその弟子たち―ベヘシュティ師、モタッハリ師、ハーシエミー・ラフサンジャーニー師、アリー・ハーメネーイ師―は、白色革命に反対して政治活動を開始させた。

一九六三年三月二日、ホメイニー師は、ゴムのフェイズイーエ神学校で白色革命を批判する演説を行った。翌日、軍隊が神学校に進入し、学生、教師を襲い、百名以上が負傷し、十数名が死亡するという事件が発生した。宗教勢力は、当局の暴力的な鎮圧に抗議するために、一九六三年六月五日に第三代イマーム・ホセイーンの殉教を追悼するアーシューラーというシリア派で最も重要な宗教儀礼の際に全国的蜂起を起こす計画を立てた。

ホメイニー師は、前節で述べたように、一九六二年以降、テヘランの宗教組織へイアトを組織化すると同時に、国民戦線に近いアスナーフ連盟との接近を図っていた。ホメイニー師とシャリーアトマダーリ師は、アスナーフ連盟のリーダーで既製服商のアボルガーセム・レバースチーを密かにゴムへ呼び出した。レバースチーは、当時、非常に高価であった印刷機を所有しており、国民戦線の広報部門を担当していた。両師の依頼で、レバースチーは、ホルダード月十五日蜂起を呼びかける声明を印刷し、他のバーザリーとともに蜂起に参加した²⁸⁾。

一九六三年ホルダード月一五日蜂起を取り締まった秘密警察サヴァクの文書によれば、テヘランでは、バーザール地区を中心に、表一のように分類される約十五万人が参加して、白色革命と前日のホメイニー師逮捕への抗議運動が繰り広げられた。

表一の「(2) 国民戦線のバーザール委員会に所属するバーザリー」は、アスナーフ連盟メンバーを指すと考えられ、モタレフェ協会は、「(3) 宗教

表1：1963年ホルダード月15日蜂起への参加者

(1) イラン自由運動関係者
(2) 国民戦線のバーザール委員会に所属するバーザリー
(3) 宗教勢力グループに関連したバーザリー
(4) 15-35歳のバーザールの下働きの労働者
(5) マルクス主義グループに所属する労働者
(6) ティーブのような自らの影響力保持を目的とするやくざに関連した露天商、あるいは、テヘラン南部に住む人々でイスラームの説教師の影響を受けた露天商。
(7) 失業者
(8) フェダーイーヤーネ・エスラーム
(9) 一部の大学生と神学生と破壊分子

(出典：Rūhakhsh, *Naqsh-e Bāzār dar Qiyām-e 15 Khordād*, pp. 194-196より筆者作成。)

勢力グループに関連した「バーザリー」と「(8) フェダーイーヤーネ・エスラーム」のカテゴリーに含まれると考えられる。一九六三年当時、サヴァクは、まだ、モタレフェ協会の存在を十分に把握していなかった。モタレフェのメンバーの方でも、表向き、アーシユラーの宗教行事を行う宗教的・文化的組織であることを強調し、信頼のおける仲間のみ加入を認める少数精鋭の秘密活動に徹した。モタレフェ協会の存在が、当局によって把握されるのは、一九六五年の同組織メンバーによるハサン・マンスール首相暗殺事件以降のことである。

ホメイニー師の弟子で、イラン革命後、国民議会議長、大統領など要職を歴任したラフサンジャリーニーは、以下のように、同蜂起におけるモタレフェ協会の役割について語っている。

ホメイニー師とウラマーたちが、ホルダード月十五日蜂起で中心的な役割を担ったが、イスラーム・モタレフェ協会もモスクやホセイニエでの集会ネットワーク、宗教的なヘイアトを利用して大きな影響力を発揮した：中略：ホルダード月十五日の闘争においてわずかな政治資金しかなかったが、そのわずかな資金を拠出したのはイスラーム・モタレフェのヘイアトで、それ以外に献金する組織はなかった。

ホメイニー師ら宗教勢力の主導したこの蜂起を通して、反体制派の共闘の経験が蓄積されたが、一部で、イスラーム主義者とナシヨナリストが主導権争いを繰り広げる場面も見られた。サブゼ・メイダーンの行商人ホセイン・モジャヤーヘッド率いる一団のバーザリーたちは、バーザールを出て、テヘラン大学に向けて「ホメイニー師支持、白色革命反対」のスローガンを唱えながら、デモ行進を行った。テヘラン大学で、国民戦線所属の学生ハスイービーが、バーザリーを歓迎する演説をし、「モサツデク万歳、ホメイニー万歳」とスローガンを叫んだ。これに対し、バーザリーの一部が「我々は、ホメイニー師支持で、モサツデクは関係ない」と叫んだが、他の人々は構わず、「モサツデク万歳、ホメイニー万歳」とスローガンを叫び続けた²⁰。

結局、蜂起は、政府の弾圧により、全国で百名を越える死傷者を出し、翌年の一九六四年十一月にホメイニー師の国外追放及び主な政治的指導者の逮捕という結果に終わった。一九六五年、モタレフェ協会は、ホメイニー師に

国外追放の命令を出したとされる首相マンスールを暗殺したことによって、一躍有名になった。実行犯のモハンマド・バハラーイー以下三名は処刑され、エラーギー、ハビーボツラー・アスガルオウラーディー、アサドツラー・ラージエヴァルディーら党幹部多数も長期間の禁固刑を受けることとなった(写真二)。モタレフェ協会の主要メンバーは、革命運動の本格化する直前の一九七七年二月に釈放された²¹。



写真2

1965年のマンスール首相暗殺事件の軍事裁判に臨むモタレフェ協会の実行犯4名とメフディー・エラーギー(出典：Markaz-e Barrasi-ye Asnād-e Tarikhi-ye Vezārat-e Ettelā'āt (ed.), *Shahīd Hāj Mehdī Erāqī* 巻末写真)

四．革命とバーザール

一九七七年から七九年にかけての革命運動においてテヘラン・バーザールの閉鎖、テヘラン南部での大規模なデモ行進がイラン革命の成功の大きな鍵となったと言われている。当時、バーザールを中心とするテヘランの経済界には大きく分けて、(1) 国王に近い大企業家、(2) 無党派、(3) 国民戦線系ナシヨナリスト(アスナーフ連盟)、(4) ホメイニー師に近いイスラーム主義組織(モタレフェ協会)の四つのグループが存在した。このうち、テヘラン・バーザールでの革命運動の組織化に関わったと考えられるのは、アスナーフ連盟とモタレフェ協会である。

一九七七年に人権外交を掲げるカーターがアメリカ大統領に就任すると、国王は、二十年に亘って首相を務めた側近のアミール・アッバース・ホヴェイダーに代わって、ジャムシード・アームーゼガルを首相に任命し、政治犯多数を釈放した。自由化の兆しを察知した国民戦線のリーダーは、政治的自由化と汚職追放、人権尊重を求めて、国王に対する公開書簡を出した。アスナーフ連盟は、同書簡に支持を示すために、バーザール閉鎖を計画した。しかし、一般のバーザリーは、秘密警察サヴァクの弾圧を恐れて運動に参加しようとしなかった。そうしたバーザリーの態度について、レバースチーは、「ピラ一枚持っていたり、本一冊を持っているという理由で、七年八年投獄されるのがざらだった。従って、バーザリーが（政治集会に参加することを）恐れるのも当然のことだった」とその理由を説明している³⁵。こうした無党派のバーザリーも政治的自由化の進展の中で、次第に反国王運動に参加していった。また、一九七五年以降、政府がオイルブームに伴う高インフレへの無策を棚上げして、「価格抑制・不当利得者摘発キャンペーン」と称してバーザール商人への規制を強化したことも、バーザリーたちの運動参加を促した³⁶。

テヘラン・バーザール内で、再結成されたアスナーフ連盟は、一九七七年十月に暗殺された「ホメイニー師の息子モスタファ・ホメイニー師の追悼」という名目で、政治集会を開催し、国民戦線リーダーのダリューシユ・フォルルハルやイラン自由運動のメフディー・バーザルガンを含め、約千五百名が参加した³⁷。さらに、十一月二二日の犠牲祭にテヘラン郊外のキャラヴァンサラー・サンギーで集会を開催し、約千名の国民戦線関係者とバーザリーが集まったが、サヴァクによって集会は襲撃され、参加者の多数が負傷をした³⁸。サヴァクによる監視や攻撃は存在したものの、政治活動の自由は、七七年以前に比べて確実に拡大していた。一九七七年十二月十一日にイラン国家党のフォルルハルが国民戦線の復活を宣言すると、アスナーフ連盟は国民戦線と連携して反国王運動を実施した³⁹。そして、一九七八年一月に、エツテラーアト紙に掲載されたホメイニー師中傷記事へ抗議したゴムの神学生たちが、警察隊の発砲で死亡したことをきっかけに、反国王運動は全国的な広がりを見せた。

アスナーフ連盟が準備した最大の集会は、一九七八年九月の断食明けの祭り（イード・アル・フィットル）の大行進であった。このデモ行進が、革命運動最大の犠牲を出したとされる、九月八日「黒い金曜日事件」のきっかけと

なった。大行進の企画には、アスナーフ連盟に加え、国民戦線、イラン自由運動、ベヘシュティー師らホメイニー師の弟子の率いる宗教勢力も参加した⁴⁰。準備の過程で、主導権は、次第にベヘシュティー師率いる宗教勢力に移っていった。その理由は、統率力と話術に長けたベヘシュティー師の素質によるところも大きかったが、何よりも、イスラーム主義組織がモスクを通じての組織力と大衆動員の手段を有し、社会運動の資源が蓄積されていたことを原因したものと考えられる。

レバースチーによれば、「秩序維持係の九〇%をモスク付属の組織が運営した。当時、組織と言えば、モスク関係のものだった。各地区のウラマーがそうした宗教グループを組織し、傘下に置いていた。我々には、秩序維持にあたる実働部隊を持つような能力はなかったが、モスクがそうした人材を擁していた。」とされる⁴¹。

革命運動が高揚し、その圧力に押されて、パフラヴィー王朝が自由化へと政策を転換させると、従来、政治に参加していなかった多くの大衆が革命運動に参加するようになった。一九七〇年代以降のオイルブームで大量に地方からテヘランに流入した貧しい人々は、国民戦線やイラン自由運動などの世俗政党ではなく、各地区のモスクを中心に組織されたホメイニー師の宗教ネットワークに組み込まれていくこととなった⁴²。イスラーム主義組織が、都市の下層階級を惹き付けた理由として、パールサーは、「資源動員論」に基づき、民族主義的な世俗政党が、パフラヴィー朝による徹底的な弾圧のため、組織として弱体化していたのに対し、宗教勢力は、弾圧を免れたモスクを通じた人々の動員と思想普及の手段という政治運動に必須の資源を有していた、と論じている⁴³。

社会運動論において、運動の成功は、政治的機會、運動を統制する組織の資源、シンボルの効果的な使用に大きく依存している。レバースチーは、一九七八年九月七日の大行進において、運動のシンボルを巡って、組織間で対立があったことを記している。

ある会合で、ホメイニー師以外の写真は決して掲げないということに決まった。しかし、何人かは、シャリアティーの写真を、我々はモサッデクの写真を掲げたいと望んでいたもので、この点で、衝突があり、怒ってその場を立ち去りたいとさえ思った……中略……何人かがモサッデクの写真を持ってきたが、掲げることは許されなかった……中略……これ以後、我々と宗教勢

力の間の不和が始まった。³⁸

大行進の日に掲げる写真がホメイニー師の写真に統一化されたという事実は、革命運動が次第に「イスラーム」へと方向付けられ、ホメイニー師が、革命のシンボルとされていったことを明示している。一九七八年十二月十日から十一日はシリア派の祭日タースーアーとアーシシュラーに一致し、各街区のハイアトが殉教した第三代イマーム・ホセインの追悼行進をするため、人々を動員するための絶好の機会であった。再び、反体制派が共同でデモ行進を企画し、実行委員の中にはラフサンジャーニー師やイラン自由運動のエザトッラー・サハービーに加え、モタレフェ協会のエラギーとアスガルオウラーディーが名を連ねた。数百万人の参加する大規模な抗議運動は、国王に国外脱出を決意させる結果となった。³⁹ 他方、国王の妥協策を受け、十二月二十九日に国民戦線リーダーのシャープール・バフティヤールが他のメンバーの反対を押し切って、首相に就任して以後、大衆の間での国民戦線の影響力は次第に低下していった。

このようにストリートの主導権は、組織力に優れ、ホメイニー師という大衆を惹きつけることのできるカリスマ的リーダーを持つイスラーム主義組織に移っていった。一方、当時、イラン経済界を独占していたパフラヴィー朝に近い大企業家は革命前に続々と欧米に亡命した。大企業家層が抜けた空白を誰が埋めるか、という経済利権を巡る確執も同時並行で進行していた。国王の資産を管理していたパフラヴィー財団と海外移転に失敗した大企業家の財産は、革命後、モスタザファーン（被抑圧者）財団によって吸収され、同財団理事長にモタレフェ協会のリーダーが就任した。

五. 革命後のバーザールの変化

一九七九年二月一日のホメイニー師のバリからイランへの帰国を頂点とするイラン革命は、国民戦線の流れを汲むリベラルな民族主義組織、フェダーイーヤーネ・ハルクやモジャヤーヘデーイーネ・ハルクといった左翼組織、ホメイニー師を信奉するイスラーム組織等、様々な組織による共闘の結果、実現した。当時、国民戦線は世俗国家の樹立を目指し、イラン自由運動はイスラーム的社会主義の実現を掲げ、ホメイニー師率いる宗教勢力は、イスラームを国家の基礎に据えたヴェラーヤテ・ファキーフ体制を志していた。

しかし、一九七九年十二月二日にイスラーム体制の樹立を規定する新憲法が国民投票によって圧倒的多数で批准され、国民戦線やイラン自由運動など民族主義組織が次々と権力から排除され、一九八一年にはホメイニー師の側近、ベヘシュティー師の設立したイスラーム共和党が政権を掌握した。

テヘラン・バーザール内部には、金細工バーザール、布地商バーザール、絨毯商バーザールと業種毎のバーザールがあり、さらに各々のバーザールは、いくつものサライと呼ばれる中庭を囲んで商店、事務所、倉庫からなるショッピングセンターによって構成されている。この頃、バーザールでは、サライ毎に、親政府派のイスラーム組織が作られ、政府に批判的なバーザリーを監視する体制ができあがった。レバースチーは、我々は「監視されており、息をつこうものなら打たれるという雰囲気だった。」と当時の様子を語っている。⁴⁰

イスラーム共和党政権は、モタレフェ協会のメンバーを経済関係の重職に登用し、アスナーフ連盟の既得権益を脅かすようになった。一九八一年から八四年まで、モタレフェ協会のアスガルオウラーディーは商業相に、モルテザー・ナバヴィーは郵政相の地位に就いた。⁴¹ 一九八〇年十二月にアスナーフ連盟は、ラジャイー首相の経済政策を批判して、新聞に声明を発表した。これを受け、ハーメネイー師は、レバースチーらアスナーフ連盟リーダーに会見し、首相の経済顧問の職を提示して宥和を図った。リーダーたちが協力を拒否すると、両者の関係は次第に冷却化した。⁴²

一九八一年六月にバーザリーの間で人気であったアボルハサン・バニィサドル大統領が、イスラーム共和党との権力闘争に敗れてフランスに亡命すると、政府はバーザールへの規制を強めた。現政権への協力を拒否したアスナーフ連盟リーダーは、逮捕され、財産を没収された。さらに、一九八一年七月にテヘラン・バーザールで有名な布地商のキャリム・ダストマルチー（国民戦線とアスナーフ連盟のリーダー）が暗殺され、アフマド・ジャワーヘリヤーンが、マルクス主義とイスラームを掲げるゲリラ組織モジャヤーヘデーイーネ・ハルクと通じていたことを理由に処刑されるに至った。その後、レバースチーを含めた多くのアスナーフ連盟のリーダーが国外に亡命した。⁴³

このように革命後の政治闘争の中で、政府の経済関係の要職の大半はモタレフェ協会が占めるようになった。他方、アスナーフ連盟に属したナシヨナリストのバーザリーたちは、専らバーザールの経済活動に専念し、政治的な動きを余り示すことはなくなっていた。

おわりに

近現代イランの社会運動の主な登場人物と考えられてきたバーザリーに関する研究は、宗教要因説も経済要因説も、バーザリーを一体的に捉え、運動参加の原因も一つの要因に単純化される傾向にあった。ケシャーヴァルズイアーンは、バーザールを、政府の政策に対応して商取引を円滑化させるために形成された様々な「ネットワーク」の総体であると捉え、情報伝達を促進し、運動への参加／不参加者の賞罰や信用システムをあわせ持つ、人々の間の「ネットワーク」の支配的構造が「協力的ヒエラルキー」の場合、政治活動を促進すると考えた。しかし、「ネットワーク」を分析単位とした場合、具体的な運動参加の実態が捉えにくいという問題点がある。従って、組織がネットワークの核となり、アイデンティティ統合の目印となっていたと考え、バーザール内の「組織」を分析単位とした。

本論では、民族主義派のアスナーフ連盟とイスラーム主義組織モタレフェ協会というテヘラン・バーザール内の二つの政治組織が、一九六三年ホルダード月十五日蜂起と、一九七九年イラン革命にどのように参加したかを概観した。分析の結果、革命前にテヘラン・バーザールで支配的であったアスナーフ連盟と革命後に権力を持ったモタレフェ協会は、イデオロギー及び社会経済的地位の点で著しく異なっていたことが判明した。すなわち、商取引と伝統の上に形成されたアスナーフ連盟と、イスラーム主義組織のモタレフェ協会は、活動の舞台がテヘラン・バーザール地区であること及び反国王の二点において、共通点はあったものの、イデオロギー、政治目標や宗教界との関係の密度が異なっていた。

両者は、反国王という立場で一九六〇年代から一九七九年のイラン革命まで共闘したが、革命後、モタレフェ協会は、バーザール共同体全体の利益よりも、ホメイニー師との関係性やイスラーム体制の護持を優先した。その背景には、宗教的要因に加え、社会経済的要因があったものと考えられる。アスナーフ連盟のメンバーが主に伝統産業関連のアスナーフに所属する中小の職人・商人で構成され、バーザール内での職業及び名声で築かれる地位が高く、発言権の強い人物がリーダーに就いていたのに対し、モタレフェ協会のメンバーは、バーザール内ヒエラルキーの相対的下層に属した。イスラーム主義と「イスラーム革命」が、伝統的なバーザールの位階制度に不満を持つ

人々に、ある種の解放と新たなチャンスを与えた点も無視できない。

以上の分析結果から、社会運動の過程で、バーザール内の組織は、バーザールの外の宗教勢力や政党とイデオロギーやシンボルを軸に連携、対立しており、その対立の背景には、新たな国家建設の理念を巡る権力闘争と同時に、旧支配層の利権配分を巡る社会経済的要因があったものと考えられる。従って、バーザリーの運動参加の原因としてイデオロギーや社会経済的要因を捨象することは困難である。また、政治的機会を捉えて、バーザール内のネットワークが、日常から政治運動モードに転換する際、政府の政策だけではなく、バーザール外の政党や宗教組織のネットワークの影響を受けていた点が指摘できる。すなわち、テヘラン・バーザールは、国民戦線やイラン自由運動に代表されるナシヨナリスト・ネットワークとホメイニー師の形成したモスク・ネットワークというテヘラン・バーザールの外に全国的に広がるネットワークの結節点であったともいえる。テヘラン・バーザール内の政治組織とバーザール外のネットワークの関係の詳細な分析は、今後の課題としたい。

【註】

- (1) Floor, Willem M., "Bazar: ii. Organization and Function," *Encyclopaedia Iranica* IV, 1989, pp. 21-25.
- (2) 現代イランのバーザリーの多様性については、岩崎葉子『テヘラン商売往来：イラン商人の世界』アジア経済研究所、二〇〇四年を参照。
- (3) Keddie, Nikki R., *Iran: Religion, Politics & Society*, London: Frank Cass, 1981, p. 245. Ashraf, Ahmad, "Bazaar-Mosque Alliance: The Social Basis of Revolts and Revolutions," *International Journal of Politics, Culture, and Society* 1 (4) (1988), pp. 538-567.
- (4) Parsa, Misagh, *Social Origins of the Iranian Revolution*, New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 1989, pp. 38-44. Parsa, Misagh, *States, Ideologies & Social Revolutions: A Comparative Analysis of Iran, Nicaragua and the Philippines*, Cambridge: Cambridge University Press, 2000, pp. 202-203.
- (5) Keshavarzian, Arang, *Bazaar and State in Iran: The Politics of the Tehran Marketplace*, Cambridge: Cambridge University Press, 2007, pp. 272-274.
- (6) *Ibid.*, p. 263. 革命後のモタレフェ協会については、以下の論文を参照。Keshavarzian, Arang, "Regime Loyalty and Bazaar Representation under the Islamic Republic of

- Iran: Dilemmas of the Society of Islamic Coalition,” *LMES* 41 (2009), pp. 225-246.
- (7) Ashraf, Ahmad, “Chamber of Guilds,” *Encyclopedia Iranica* V (1991), p.359. Torkaman, Mohammad (compel.), *Qiyām-e Mellī-ye Sīom-e Trī*, Tehran: Dekhoda, 1982/1360 (Kh.), pp. 53-54.
- (8) Lebaschi, Abol Ghassen, Interview by Habib Ladjevardi on February 28, 1983, *Iranian Oral History Collection*, edited by Habib Ladjevardi, Cambridge, MA: Center for Middle Eastern Studies, Harvard University, 1983, tape 1, p.5. Ashraf, Ahmad, *Marvāne ‘e Tarīkhi-ye Reshd-e Samāyedarī dar Irān: Douwe-ye Qājārī-ye*, Tehran, 1980/1358 (Kh.), p.31.
- (9) Parsa, *Social Origins of the Iranian Revolution*, pp. 95-98.
- (10) 石油国有化運動期に、モサッテク政権が保守派議員の妨害で危機に陥ると、布地商センプ・リーダーのアフマド・ハリリーからアスナーフ連盟代表が、国会議長に対し、立憲制度を守るための要請をする記事が見られる。Bakhtar-e Emruz, 8 January 1952 & Eftelā‘āt, 23 December 1951 を参照。
- (11) Parsa, *States Ideologies & Social Revolutions*, p.203.
- (12) IOHC: Lebaschi, tape 2, p.7.
- (13) Parsa, *Social Origins of the Iranian Revolution*, p.92.
- (14) Rūhbaksh, Rahīm, *Naqsh-e Bazār dar Qiyām-e 15 Khorādd*, Tehran: Markaz-e Asnād-e Engelāb-e Eslāmī, 2002/1381 (Kh.), p.45.
- (15) *Ibid.*, p.292.
- (16) Floor, “Bazar: ii. Organization and Function,” pp. 26-27.
- (17) Torkaman, *Qiyām-e Mellī-ye Sīom-e Trī*, pp. 53-54.
- (18) Parsa, *States Ideologies & Social Revolutions*, pp. 202-205. Keshavarzian, *Bazaar and State in Iran*, pp. 248-255.
- (19) ハイアトは現在でも、イランの都市の各地区に存在する。アーシェラーのお祭りの際、各地区あるいは職業集団毎にアラムやナフルと呼ばれる装飾のついた竿を先頭に幼年から老年の男子が隊列(ダステ)を組んで胸を手、あるいは鎖で叩きながら街を練り歩く。このアーシェラーの儀式挙行のための組織をハイアトと呼んでいる。地区でも宗教的な人々がボランティアでアラムやホセインの棺を模した山車や鎮の管理、炊き出しの中心的役割を果たす。
- (20) Ferdows, Amir H., “Khomeini and Fadayān’s Society and Politics,” *LMES* 15 (1983), pp. 241-257. 富田建次『アーヤトollahたちのイラン：イスラーム統治体制の矛盾と展開』第三書館、一九九三年、十二～十五頁。
- (21) Rūhbaksh, Rahīm, “M’otalefe: Mirās-e Fedāyān,” *Majmū‘e-ye Maqālāt-e Hamāyesh-e Bozorgdashī-e Panjāhomīn Sātegar-e Shahādāt-e Navāb Sāgarī va Fedāyān-e Eslām*, Vol. II, Tehran: Markaz-e Asnād-e Engelāb-e Eslāmī, 2007/1385 (Kh.), pp. 391-393.
- (22) *Ibid.*, pp. 394-395.
- (23) *Ibid.*, pp. 398-399.
- (24) *Ibid.*, pp. 395-397. Pashazadeh, Gholan “Ali, Zendeqī va Mobārezāt-e Shahīd Asadollah Lājevārī,” Tehran: Markaz-e Asnād-e Engelāb-e Eslāmī, 2010/1388 (Kh.), p.36.
- (25) Rūhbaksh, “M’otalefe: Mirās-e Fedāyān,” pp. 403-414.
- (26) IOHC: Lebaschi, tape 2, pp. 11-12. Rūhbaksh, *Naqsh-e Bazār dar Qiyām-e 15 Khorādd*, p.296.
- (27) テヘラン大学学生リーダーのハスィービーは、モサッテク政権で石油担当顧問を務めた国民戦線リーダーのカーセム・ハスィービーの息子で、アスナーフ連盟リーダーで既成服商のアボルガセム・レバースターの甥。Rūhbaksh, *Naqsh-e Bazār dar Qiyām-e 15 Khorādd*, pp. 194-196. Erāqī, Mehdi, *Naqsh-e Kāfārāt-e Shahīd Hajj Mehdī Erāqī 1357-1978 Pāz- Paris*, Tehran, Mo’assese-ye Khadamāt-e Farhangī-ye Resā, 1992/1370 (Kh.), pp. 180-182.
- (28) Markaz-e Barrasī-ye Asnād-e Tarīkhi-ye Vežārat-e Eftelā‘āt (ed.), *Yārān-e Enām be Ravāyat-e Asnād-e SAVAK (Vol. II): Shahīd Asadollah Lājevārī*, Tehran: Markaz-e Barrasī-ye Asnād-e Tarīkhi-ye Vežārat-e Eftelā‘āt, 1999/1377 (Kh.), pp. 1-28. Markaz-e Barrasī-ye Asnād-e Tarīkhi-ye Vežārat-e Eftelā‘āt (ed.), *Yārān-e Enām be Ravāyat-e Asnād-e SAVAK (Vol. XII): Shahīd Hajj Mehdī Erāqī*, Tehran: Markaz-e Barrasī-ye Asnād-e Tarīkhi-ye Vežārat-e Eftelā‘āt, 1999/1377 (Kh.), pp. 59-124.
- (29) IOHC: Lebaschi, tape 2, p.20.
- (30) Parsa, *States Ideologies & Social Revolutions*, pp. 205-207.
- (31) Markaz-e Barrasī-ye Asnād-e Tarīkhi-ye Vežārat-e Eftelā‘āt (ed.), *Engelāb-e Eslāmī be Ravāyat-e Asnād-e SAVAK*, Tehran: Eneshārāt-e Sedā va Sīmā-ye Jomhūrī-ye Eslāmī-ye Irān, 1998/1376 (Kh.), pp. 7-9.
- (32) IOHC: Lebaschi, tape 2, p.19.
- (33) アスナーフ連盟は、国民戦線と最も密接な関係にあったが、一九六一年に国民戦線から分裂し、メフデイー・バーザルガンとマフムード・ターレガーニー師によって結成されたイラン自由運動とも友好関係を維持した。例えば、アスナーフ連盟は、一九七八年一月にターレガーニー師の釈放を祝って、テヘラン・バーサールを閉鎖した (IOHC: Lebaschi, tape 2, p.22)。また、アスナーフ連盟リーダーの一人のモハンマド・シャーネネーは、ターレガーニー師の個人事務所に勤め、イラン自由運動と非常に近い関係にあった。
- (34) モタッハリ師やバハシエティー師等ホメイニー師の弟子と、イラン自由運動は、一九六〇年代からホセイニエ・エルシャードを舞台に「月例宗教講話会」を

- 開催するなど交流を深めていた (Chehabi, H.E., *Iranian Politics and Religious Modernism: The Liberation Movement of Iran under the Shah and Khomeini*, London: I.B. Tauris & Co Ltd, 1990, pp. 202-209. 吉村慎太郎『イラン・イスラーム体制とは何か：革命・戦争・改革の歴史から』書肆心水、二〇〇五年、七七一七八頁。また、ベヘシュティー師は一九七五年頃から、定期的にコーラン学習会を主催した。会場は、モタレフェ協会のモフセン・ラフイーグドゥースト邸や、イラン自由運動のアリー・バーバイー邸、アスナーフ連盟のマーニヤーン邸など、異なる組織に所属するバーザリーの家で持ち回りで開催され、毎回、学習会には、百名以上のバーザリーが参加した。このように当局の弾圧下で、「宗教行事」の名目で反体制派組織の交流が行われていた。Markaz-e Barrast-ye Asnād-e Tarikhi-ye Vezārat-e Ehtelā'at, *Yarān-e Emām be Ravā'at-e Asnād-e Sāf/AK (Vol. III): Shahīd-ye Vezārat-e Ehtelā'at*, 1999/1377 (Kh.), pp. 240-276.
- (35) IOHC: Lebaschi, tape 3, p.6.
- (36) Chehabi, *Iranian Politics and Religious Modernism*, pp. 216-217. Arjomand, Said Amir, *The Turban for the Crown: The Islamic Revolution in Iran*, Oxford: Oxford University Press, 1988, pp. 96-101.
- (37) Parsa, *States, Ideologies & Social Revolution*, pp. 209-210.
- (38) IOHC: Lebaschi, tape 3, p.6.
- (39) Chehabi, *Iranian Politics and Religious Modernism*, p.237.
- (40) IOHC: Lebaschi, tape 3, p.17.
- (41) *'Asr-e Azādegān*, 20 February 2000.
- (42) IOHC: Lebaschi, tape 3, pp. 18-19.
- (43) *Ibid.*, tape 3, pp. 19-21. Shانهچی, Mohammad, Interview by Habib Ladjevardi on March 4, 1983, *Iranian Oral History Collection*, edited by Habib Ladjevardi, Cambridge, MA: Center for Middle Eastern Studies, Harvard University, 1983, tape 4, p.3. 加納弘勝・駒野 欽一共著『イラン一九四〇ー一九八〇：現地資料が語る四十年』中東調査会、一九八二年、二七二二九頁。